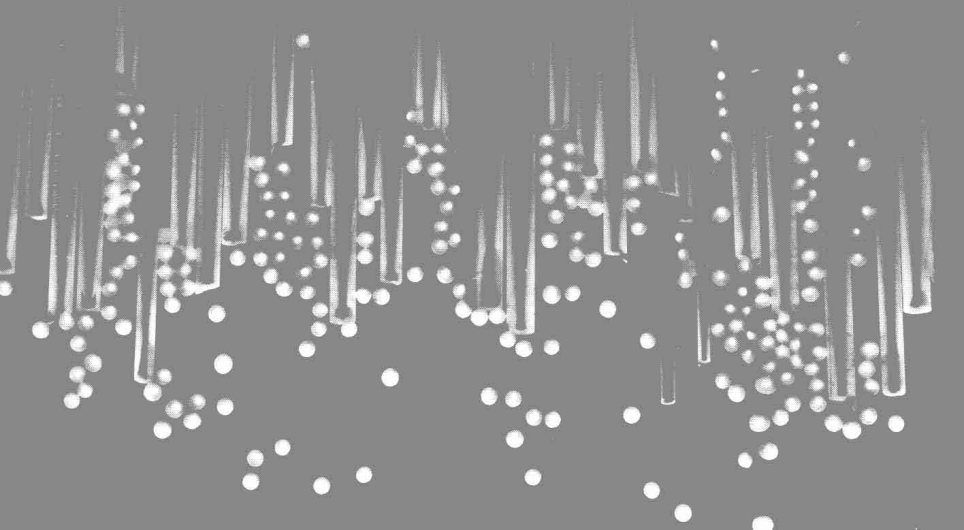
安部公房■緑色のストッキング

安部公房のストッキング

新潮劇場



書下ろし新潮劇場

安部公房（あべこうぼう）

緑色（みどりいろ）のストッキング

昭和49年10月10日印刷／昭和49年10月15日発行
発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808
印刷■株式会社金羊社／製本■大口製本
©1974, Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
定価 780 円

緑色のストッキング

14景

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

［登場人物］

男（草食人間）
妻
息子
婚約者
医者
助手（学生）
看護婦
老婆（スライド上のみに登場）
カメラマン（裏方A）
インタビューアー（裏方B）
入院患者（裏方C）
その妻（裏方D）

1

音楽――「鳴動のテーマ」

幕が上ると、舞台の中央だけが明るい。劇の進行につれて、光の輪が情況に応じて変形、もしくは変質し、最後に広い部屋になる。部屋はいくつかのブロックに分けられている。大きな草原の絵（もしくは写真パネル）が印象的だ。可能ならば、壁全体が草原の絵であってもいい。

光の中央に、パジャマ姿の男が立っている。光の輪の縁にそって、数箇の白い物体。その物体は、それぞれのポーズでうずくまっている登場人物たちや小道具の上に、大きな白布を掛けたものである。一見したところ、埃除けのカバーをした家具か彫刻のようでもある。

男　……おれはいま、何かを理解しかけている。何かが見える。（はげしい集中の表情）怒りと、愛を、まぜ合わせた色。緑の炎で焼いた石の色。必要なのはアドレナリンだ。両腕と両脚の筋肉に、アドレナリンのしぶきをあびせて、とにかく駈出してみることだ！（内省的な調子に変り）君は幸福かい？　もちろんさ、と、答えてはみたものの、そうかねえ……ただ不幸だと思うのが恐いだけじゃないのかい？　疑ったとたんに、足元の床が、ぐらっと来る。（よろめく仕種）まずいのは床の仕掛をちゃんと知っていることなんだ。（不安そうにバランスをとりながら、見おろす姿勢）底なしの穴。ちょっと覗いてみたくなる。恐いもの見たさの好奇心。（顔をそむけて）黴だらけの風の臭いが鼻をさす。しかし虫歯の味だってまんざらじゃない時があるからな……

男、壁ぎわに歩みよる。スイッチ・ボックスがある。中にハンドル型の大きなスイッチ。ＯＮにする。電気的な音をたてて床の一部がせり上る。一メートル四方の立方

体。メカニックな構造と同時に、どこか意味ありげな田園風の装飾。

千九百……何年でしたか……いまから、たしか三年ほど前、一人の老婆が死にました。（床からせり上った立方体の角に手をのせ）天涯孤独の気の毒な年寄でした。あとに残したのは、小さな牧場でした。

男、立方体から離れ、光の輪の周辺に並んでいる白い物体の一つに歩みよる。

その牧場を買い取ったのは、一人の若い医者でした。

男が物体から白布をめくり取る。白布の下から、白衣の医者があらわれる。膝まずいた姿勢から、何か地面から拾い上げた感じで立上り、半ば観客に、半ば男に向って、医者が語りはじめる。

医者　（はにかむような微笑）牧場だなんて、そんなつもりはなかったんだ。驚きましたね。ちっぽけな、ただの土地のつもりで……すぐ病院と地つづきだった

し、住んでいたのが、ちょうど身寄をなくしたばかりの気の毒な婆さんでね。最初は単なる同情でした。死んだ亭主というのが、戦争で片腕をなくした大工で、貯えだって知れたもんでしょう。あんのじょう、三月もしないうちに、そこの地主が立退きをせまりはじめた。地代の工面にも事欠く始末らしい。おまけに間もなく、ガスがとめられ、電気も切られてしまった。どうしようもないじゃないか。見るに見かねて、土地ごと買い受けてやったというわけです。

男　地主が変っただけのことじゃないの。

医者　いや、無理強いはしなかった。いちおうの条件はつけて、常識をかなり上まわる線で、立退きの交渉はしてはみたけど、あっさり拒否されちまってね。ほかにもいろいろとあったけど、細かいことは省略しよう。とにかく気長に待つことにしました。いずれ現金がなけりゃ困るだろうし、そう言っちゃなんだが、残り少い寿命だしね。

男　でも、三年も待たされた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

医者　そう、三年……

男　若い医者は首をかしげた。どうやって暮しを立てているのだろう？　気にしはじめると、よけい気になる。ある日とうとう、アルバイトの学生をやとって、調べさせてみることにした。

男、第二の物体から白布をはぎ取る。学生（あとで医者の助手）があらわれる。学生はスライドの投影機をかかえている。

学生　スクリーン、おねがいします。

医者がスクリーンをセットする。

学生　あかり！

男が壁のスイッチを押し、舞台暗黒。投影機が作動しはじめ、スクリーンに次々と奇妙な映像がうつし出される。まず最初は、顔の前に肘を上げ、はげしい拒絶の表情を見せている老婆の全身像。

医者　怒らせちゃったな？

学生　ちょっと驚かせただけですよ。

医者　何か分った？

学生　右手に、ほら、なんて言ったっけ、豆を炒ったりするのに使うもの……

医者　ほうろく。

学生　うん、ほうろく。

医者　何を炒っているんだろう？

学生　けっこう、こうばしいにおいなんだ。トウモロコシのミルク煮を焦げつかせたような、甘みがあって……

医者　で、なんだったの？

学生　率直に聞いてみました。やはり、当ってみるものですねえ。ぼくら……つまり、ぼくと先生のことだけど、（老婆に話しかける感じで）本当に心配しているんです。お婆ちゃん、ちゃんと食べていますか？　どうやって食べているん

です？　いつも朝早く、三十分ばかり散歩に出て、近所の材木屋から切れっ端を少々ひろってくると、あとは一日中こもりっきり、買出しに出掛ける様子もない。もちろん訪ねてくる人もいない。一体どうやって食べているんだろう？　あれじゃ食べようがないじゃないか。

スライドが、床を指さして笑っている老婆に変る。

医者　そしたら？

学生　ほら、笑っているでしょう。いらんお節介だって。

医者　（苛立ち気味に）でも、どうやって？

学生　牧場があるんだって。

医者　牧場？

学生　あの指でさしているところ、切り穴があるんだ。何か飼っているらしいんですよ。

医者　飼ってる？　何を？

スライドが、さらに変る。ぼろぼろになった畳の切り穴を、俯瞰で撮ったもの。突き出された老婆の足。

学生　さすがに抵抗されちゃいましたよ。見せたくないらしいんだ。でも、あれは虫だな。虫でなかったら、蛹か幼虫……

医者　（画面をのぞき込みながら）虫……？

学生　牧場はよかったな。まるでガリバー旅行記だ。

医者　なんの虫だろう？

学生　蛆じゃないですかね？

医者　まさか！

学生、投影機のスイッチを切り、立上る。男が部屋の明りを点ける。

学生　見本にと思って、一匹ひろって来ましたよ。ほら、これ……（ひねった紙をひろげ、医者に差し出し）炒ってしまったやつだけど……

医者、ひったくるようにして受取り、奥の作業机に向う。スタンドを点け、虫眼鏡でしらべはじめる。

医者　虫は、虫らしいね……

学生　（スクリーンを片付けながら）蛆とちがいますか？

医者　君……もしかすると、これ、白蟻じゃないかな……

学生　白蟻？　筋はとおりますね。そうか、毎朝ひろってくる木片（きぎれ）は、家畜の餌ってわけだ。

医者　ひでえ話だ！

学生　蛆よりはまだ清潔ですよ。

医者　（あらたまって）ねえ君、契約を延長するつもりはない？　条件はこれまでどおりでいい。この際もう一と押しして、証拠をにぎってほしいんだ。白蟻なんかだったら、とんでもない話だからな。

学生　（よろこびを隠し、一応は言ってみる）大丈夫でしょう、先生のところは、鉄筋な

んだし……

医者　住宅地で、白蟻の飼育だなんて、立派な犯罪だよ。

学生　でも、白蟻って、研究したらあんがい面白いんじゃないですか。何か、勘が働くんだ。たとえば、もし、白蟻の家畜化に成功したとしたら、あんがい、世界の食糧問題だって……

医者　馬鹿言うなよ、昆虫の、家畜化だなんて……

学生　蜜蜂だって、一種の家畜でしょ？

医者　だって、君……

学生　（しだいに熱をこめて）もちろん、問題はいろいろあります。白蟻のセルローズ分解能力。蛋白源としての価値。それから繁殖力。つまり経済効率ですね。さらに肝心なのは、人体に及ぼす影響。とにかく目のまえに、こうして生体実験の材料がいてくれるというのに、みすみすほうっておくなんて、そんな手はないですよ。ぼく、絶対に興味あるな。どうせなら、そこまでやらせて下さいよ。ね、いいでしょう？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com